

今日の福音書は、みなさんよくご存知の「善いサマリヤ人」の話です。この箇所の見出しに、「善いサマリヤ人のたとえ」と書かれていないのは、実際にこのようなことが起こった、みんながよく知っている出来事だったのかもしれませんが。イエス様は、「たとえ」とは言われていません。これは、私たちにも大変身近なお話なのだろうと思います。

私はこの箇所について21年前に、説教準備をして、よっぽど印象深かったのでしょう、翌年2006年の年賀状に、そのことを書いた覚えがあります。そして今年、婦人之友2月号にも書きました。

それは「弱い者には、弱い者を助ける力がある」ということです。その話をしようと思います。

エルサレムからエリコへ下る道をひとりの人が旅をして追いはぎにあいます。この場所は、明らかにユダヤという、イスラエルの中で南の、ユダヤ人たちが多く住んでいる所です。そして、追いはぎに逢った人も、特に説明がないので、ユダヤ人だったのでしょう。

そこを3人の人が通りかかります。最初のふたりは、祭司とレビ人です。どちらも、ユダヤ人です。祭司は、エルサレムの神殿で働き、宗教国家であるユダヤにおいて、指導的立場にある人です。レビ人は、その宗教行事の助けをする人です。

もう少し、詳しく言いますと、レビというのは、アブラハムの孫、ヤコブに12人の息子がいましたが、そのひとりがレビでした。彼らの住んでいた所に飢饉があったので、豊かなエジプトへ食料を買いに行くと、エジプトの宰相（つまり総理大臣）は、自分たちが売り飛ばした、弟のヨセフだったのです。

その後、ヤコブの子どもたち12人は、それぞれ部族を形成して行きましたが、長いエジプトの生活の中で、奴隷の身分になってしまいました。ところが、神様はこのヤコブの子孫たち、このヤコブはイスラエルという名前をもらいまして、イスラエルの12部族ということになります。

その後神様は、この人たちをエジプトから脱出させる指導者を立てられました。それは、このレビ族の子孫で、モーセでした。そして、モーセを補佐するために、兄のアロン、姉のミリアムなどが活躍するわけです。やがて、シナイ山で十戒を授かると、神の民であるイスラエルは、幕屋を立てて、神様に定期的に捧げものをする祭司の仕事が必要になりました。その役割は、モーセの兄アロンの子孫など、レビ族の仕事になったのです。12部族のうち、他の11部族は約束の地に分散して農業をしたり、牧畜をしたりしましたが、レビ族は、イスラエルの各地に建てられた神殿の祭司の仕事をしていました。

最初は、祭司というのはレビ人と同じ意味だったのです。ところが、ダビデが、エルサレムをイスラエルの唯一の聖所に決めて、その子のソロモンがエルサレムに神殿を造ると、レビ族の中でも、モーセの兄、アロンの直系の人たちが祭司の仕事にあたり、それ以外のレビ族は、祭司に仕えたり、神殿の楽隊の仕事をしたり、神殿や門の守衛をしたりしていました。まあ、しかし、祭司とレビ人というのは、ユダヤ人の中では、直接神様に仕える、指導的な立場の人たちだった、ということでしょう。

これに対して、サマリヤ人とはどんな人たちだったか、みなさんよくご存知でしょうが、ダビデ王、ソロモン王の頃には、12部族が統一されていましたが、ソロモンの子ども、レハブアムが王になると、その専制的な締め付けの政策に反発した10部族が対立を起こして、ヤロブアムという家臣が中心となって、北イスラエル王国を作ります。これが南のダビデ王家を中心とするユダ族などの南ユダ王国と対立して、南北王朝時代が始まりました。南のダビデ王家は安定して、長続きしましたが、北のイスラエル王国は、しばしば革命が起こって、最後は、東の国アッシリアに滅ぼされてしまいます。

そうすると、対立していた南ユダ王国のユダヤ人が言うには（これは本当かどうかはわからないのですが）この北イスラエルの人々は、自分たちの信仰を捨てて、アッシリアなど外国人と結婚して、墮落してしまっただ。そしてやがて、南ユダ王国が東のバビロニアに滅ぼされて、50年間の捕囚生活をしました。この頃から、南ユダの人々は、自分たちをユダヤ人と言うようになるのですが、再びユダヤの国に帰ってくると、北イスラエルの国民だった人々が住んでいる地名から、その人々をサマリヤ人と言うようになりました。そしてこの人たちが、バビロニアから帰って来たユダヤ人たちによる神殿や城壁再建の仕事を自分達にも手伝わせてくれ、と申し出たのに断った、という話がエズラ記などに出てきます。

このサマリヤ人たちは、モーセの書いた最初の5つの書物だけを厳格に守っていて、現在も、自分たちの唯一の神殿である、サマリヤのゲリジム山で過ぎ越しの祭りを守っています。ユダヤ人などより、ずっと厳格で、その結果、現在では数百人しか、サマリヤ人という人はいないようです。

まあ、それにしても、イエス様の時代、サマリヤ人は、南のユダヤと北のガリラヤの間に位置するサマリヤという所に住んでいたのですが、今日の話で登場するサマリヤ人は、旅をしています。どこへの旅だったのかわかりませんが、話の最後に「この人を介抱してください。費用がもっとかかったら、帰りがけに払います。」と言いました。ですから、どこかへ出かけて行く途中で、傷ついた人に出会い、宿屋に連れて行ったあと、自分の目的を果たす旅を続け、それが終わったら、また、ここを通過して自分の家に帰る予定なのでしょう。

これで、追いはぎにあった人の前を通る三人の立場が、はっきりします。話の舞台は、ユダヤの国。そして、最初の祭司とレビ人は、そのユダヤの国で、指導的な立場の人たち。言わば、強い人たちです。しかし3人目のサマリヤ人は、ユダヤ人とは対立している隣の国の外国人。ユダヤ人たちの社会にあつては、少数者、弱者ということになると思います。

ところが、追いはぎにあつて、傷つき倒れている人を、助けることができたのは、強いユダヤ人ではなく、弱い立場のサマリヤ人だったということが、この話の大切なところです。

どうして、強い人は、弱い人を助けることができなかったのでしょうか。それは、強い人は、苦しんでいる人の痛みが理解できないからです。自分自身、弱い立場に立ったことがないか、あるいは本当は弱い立場を経験しても、それは恥かしいことで、忘れてしまいたいと思い、また、弱いことを軽蔑するような心があつたのではないか、と私は思います。このことが、結局、人を助けられない人間になってしまうように、私には思えるのです。

それに対して、サマリヤ人は、外国を旅して、自分が少数者の立場に立ち、辛さをよく知っていたから、やはり道で倒れている人の痛みがわかって、ほっとけない、気持ちにさせられたのでしょう。

私は、時々、外国へ行きましたが、特にひとりで旅をするような場合、普段は日本の中の大多数の日本人のひとりとして、言わば強い立場の人間として生活しています。しかし、ひとりで外国へ行くと、周りはみんな外国人、と言うより、自分だけが外国人として、弱い立場に立たされるわけです。言葉も習慣も違う人々の中で苦勞があります。やがてそれには慣れてゆくかもしれませんが、大切なのは、自分が少数者の立場に立って、弱い人の気持ちを理解できる経験をする、ということです。それが、人を助ける原動力になるのではないか。

この数年の新型コロナウイルスに対する国の対応、また、ウクライナの戦争についての、戦争を起こしたプーチン大統領などの発想など、自分の命と国民の命を同じ大切なものと思えない、自分達の利権の方が、国民の生活より大切だと思ってしまう、特権階級のおごり。そんなものが、強い者と弱い者の分断した社会だと思ってしまうのです。それは日本の政治家たちだけでなく、私たちの教会の組織のなかにも、何か格差社会、上級国民と下級国民みたいな断絶を感じるのです。

つまり、強い人には、弱い人の気持ちがわからず、弱い人を助けることはできない、ということです。本当に、弱い人を助けることができるのは、同じように弱い立場にある人が、相手の気持ちに共感して、助けないではいられないからです。

新約聖書 333 ページに、自発的な施し、ということが書かれています。

『兄弟たち、マケドニア州の諸教会に与えられた神の恵みについて知らせましょう。彼らは苦しみによる激しい試練を受けていたのに、その満ち満ちた喜びと極度の貧しさがあふれ出て、人に惜しまず施す豊かさとなったということです。わたしは証しますが、彼らは力に応じて、また力以上に、自分から進んで、聖なる者たちを助けるための慈善の業と奉仕に参加させてほしいと、しきりにわたしたちに願ひ出たのでした。』（Ⅱコリント 8：1～4）

私は、先週、「フィリピン人の鼻はどうしてペシャンコなのか」という伝説の話をしました。

高い鼻を手に入れようと、必死になって争奪戦をおこなったけど、フィリピン人は、背が低く、走るのがおそいから、争奪戦に負けて、残ったペシャンコの鼻しかつけられなかった、という話でした。このような、自分たちが、他よりも劣っている、ということを、言い伝えてずっと現代まで語ってきたのは、よっぽど大切なことだと考えたからだろうと思います。

お互いに「鼻を高くして威張りあう」のではなく、自分たちの弱さを、素直に認めて、お互いに助け合う、競争心とは全くかけ離れた生活を、フィリピンの伝説を伝えた人たちは大切なことだと、後世に伝えたくて、この話を作ったのではないか。そして、その教えは、イエス様が語られた「善いサマリヤ人」の教えにも通じるものがあると、私には思えてならないのです。